花乃宴

又

詞を名也せり

[V. 8]

PL788
.4
.G4
1654
vol. 8
Copy 1
Asian
Japan
Cage

THE LIBRARY OF CONGRESS

2004551302

源氏十九才宰相中将正三位之

きさらぎのはつかあまり。南殿（紫宸殿之）の桜のえんせさ
せ給ふ。后。春宮の御つぼね左右にして。まうのぼり
給ふ。弘徽殿の女御。中宮のかくておはするを折ふし
ごとにやすからずおぼせど。物見にはえすぐし
給はでまうのぼり給ふ。日いとよくはれて。空の気色鳥
の声も心ちよげなるに。みこたち上達部よりはじ
めてそのみちのはみなたんいんたまはりて文つく
り給ふ。宰相中将。春といふもじ給はれりとの給ふ
声さへれいの人にことなり。頭中将。人のめう
つしもたゞならずおぼゆべかめれど。いとめやすく
もてしづめて声づかひなどもの〳〵しくすぐれ

こりぎその人ぞいこれおくしがちよそれぞろめり
お侍り地下の文人はまして此かど吉安の此ざえ
うしろくすぐれておりしますかうかうよやむごと
なきさ人お侍くもれし給ころなるよそげうしを
てぞうぐくとくもりなきさ庭よ立出る程ぞしこ
くてやはさき程のことなれどくるしげなりどし
老こうそうせどものなりおやさくやつれてまいるれ
こうも衣はさ海ぐ此らんずるなんおかしかりけるが
くどもなすどはさらよもいそぎどくのへさせこまへり
やうく入日になる程に春の鶯さしづるといふ舞いと
おもしろくこゆるに源氏の此紅葉の袈のおりお

し出されて、芸家がざし度はきて、きちはせめの
度はするは、のがれがたくてこちてのどうは、袖へ
を取をひとおれ気色ばかりまひのへるは、此べきも
のなくこゆ、左のおとゞうゝめしさも忘れて、泪おと
し給、頭中ねいづらをそしとあれば、柳芸苑といふ
舞をこれは今をこしうちすぐして、うゝこゝや
もやと心づかひやしけん、いと面白かれば、此衣のり
ていとめづらしきことは人さへりかんぶちめこれ
こゞれてまひのへど、衣はへていとはなちめもこゝ
ず、ふこなどうゝずるはも、源氏の君の此をばかうじ
もえやらで、旬ごとはぜどの心しろ、いかせどもの心は

とくいそぎうちへまゐり。かやうのおりはまづげんじのきみを
光(ひかる)ましのすへばかりどもいひでゝまうすをおぼされん中宮(ちうぐう)
見めれとまゐるはつけて、東宮(とうぐう)の女御(にようご)のおほかたならず
うき給ふもあやしうやうかうしやうふもこゝろうし
とぞおぼしける。おぼしつゝへされけり
大かたは后(きさき)のくらゐをとゞまらぬも心の
どれもおやは地(ち)心のうちなりけんとぞいはれもり
まけん。世(よ)にいふかけてちすんごとなきけう上達
さうあはれ。弘徽殿(こきでん)東宮(とうぐう)へかせのひめるがのとや
かやうすうかめる。たいそおうたしいそおうしさ
を源氏のきみのこゝちはさすがしくおぼし給

それがうへの人ぐもうちやすまてゝやうにおもひ
けぬ程にもしさりぬべきひまもやあるとふぢ
つぼわたりをわりなう悪びてうかゞひなりけど
うちふべきとぐらもさしてぞれがうちなげき
てなをあらじに弘厳殿のほそどのに立より給
へれば三のくちあきたり女御ハうへの御つぼねにや
かてまうのぼりぬひにそれが人ずくなるにハひ
なりおくのくるゝどもあきて人をともをずゝや
うまて世中のあやまちハするぞうしとゝて、や
まちのぼりてのぞき給人ハそれねたるべしいとに
くうおかしげなるこゑのなまべての人とは聞し思

おぼろ月夜にしく物ぞなきとうちずじて

こなたざまにくるものか。いとうれしくてやがて袖(そで)を

とらへ給ふ。女おそろしとおもへる気色(けしき)にてあなむく

つけ。こはたそとの給へど。源何(なに)かうとましきとて

源 ふかき夜の哀(あはれ)をしるも入月のおぼろけなら

ぬ契(ちぎり)とぞ思ふとてやをらいだきおろして戸はお

しつ。女(をんな)あさましきにあきれたるさま。源いとなつ

かしうおかしげなり。女わなゝくわなゝくこゝに人のとのたまへど

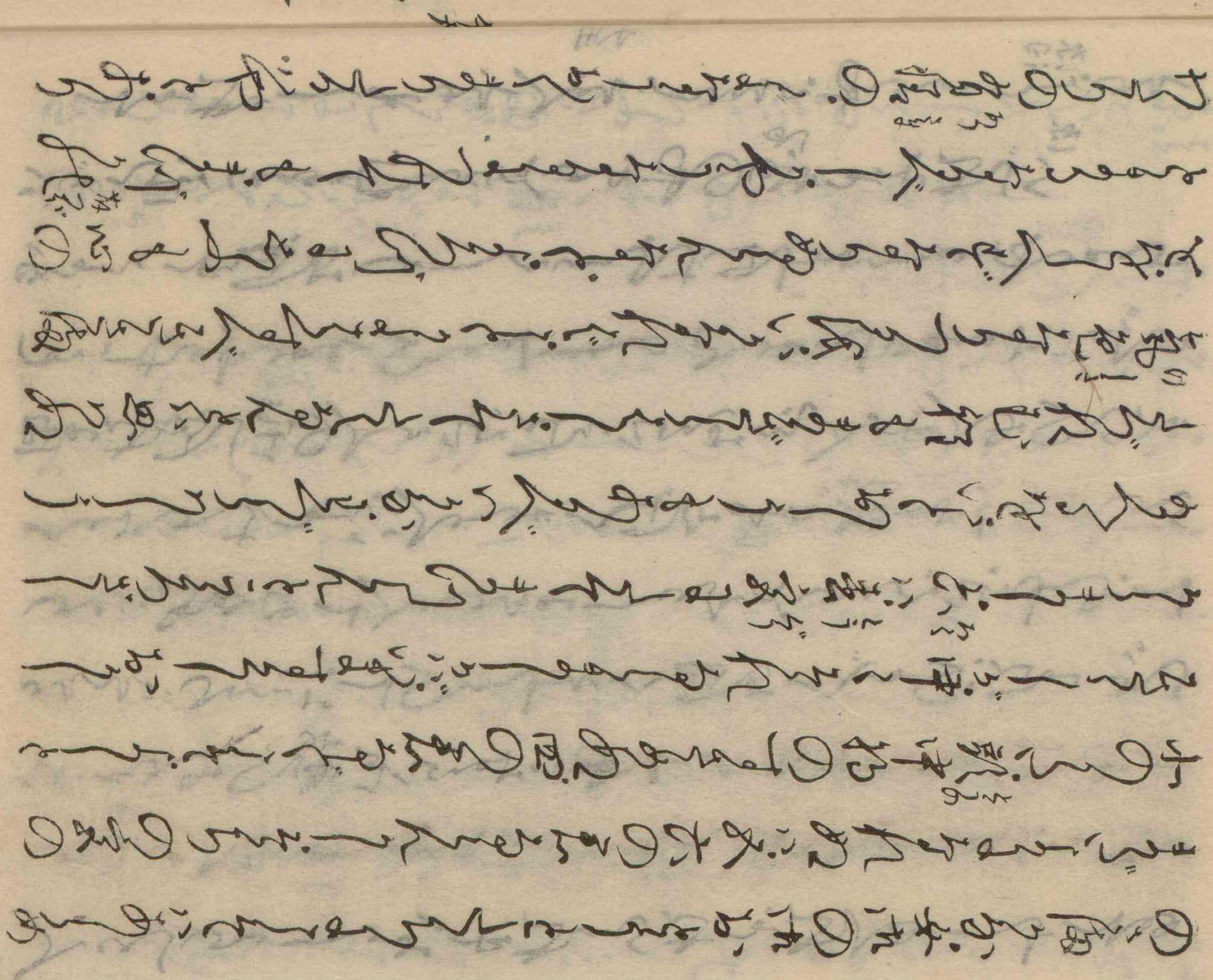
源氏 まろはみな人にゆるされたればめしよせたりともな

でうことかあらん。たゞ忍(しのび)てこその給ふ。女(をんな)

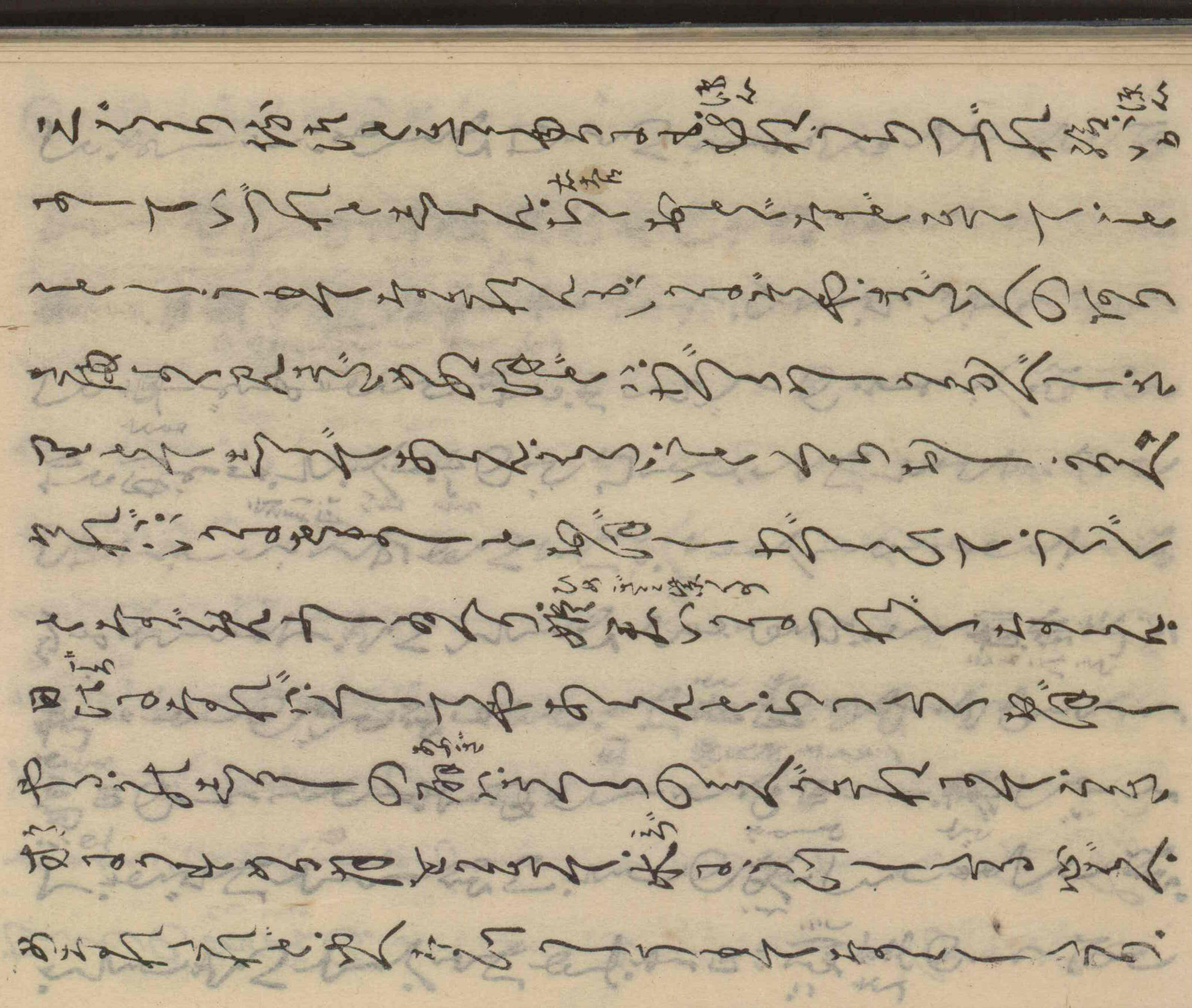
君なりけりと聞(きゝ)さだめていさゝかなぐさめけり

（女）なびしとせへるもれうち、なさけなすくこ成くし
うれしじとせへりあひ（源）ごゝちや例（れい）ならずざり
けん、ゆうさんことハうちおしこゝろ。女もかりうさ
あやござて、うきさ心もまてめなすべしら（源）うさ
しとこのかま、程なく明（あけ）ゆくまバこゝろあハく
し、女ハましてさ夜くまぜひこぼれるそし
（源詞）きなり。おもをかのりしのへいうでゝこゝろべ
こきうでやこなんと尽きりともおぼれし
なども、のかへぞ
（朧月）うしろさ見世をやうて消（きえ）なお彩ねてさ草（き）の
京（きやう）とうじとやせ、とうふさ夜、えんまなまめさ

かり(源氏)くらやどるべしきんべくらもしられとて
(源)いづれぞと宿のやどりとなるむまなこがれてハ
らまくぜまとそうけかづくしうおぼしくとか
らずいなするうつまん。ましすひきうふるしも
えいのひあへぞ、へぞおもきさとびきうへのけつほれる歯
いりちぶふ事多(けしき)どもまさげくまたへばいよかりなく
ておもぎぶらとさるしまさりえてむかめだもう
つぎまた、ひとぐくおほくさまへひてにょぶろことう
もあれバらうとざもさ毎こすき流恋(こひ)びあつきこさ
かれとうきさうひつぞされさくしおへ(源)きいう
おそかしおくれどかいふれぞ、ふうしきうつる人



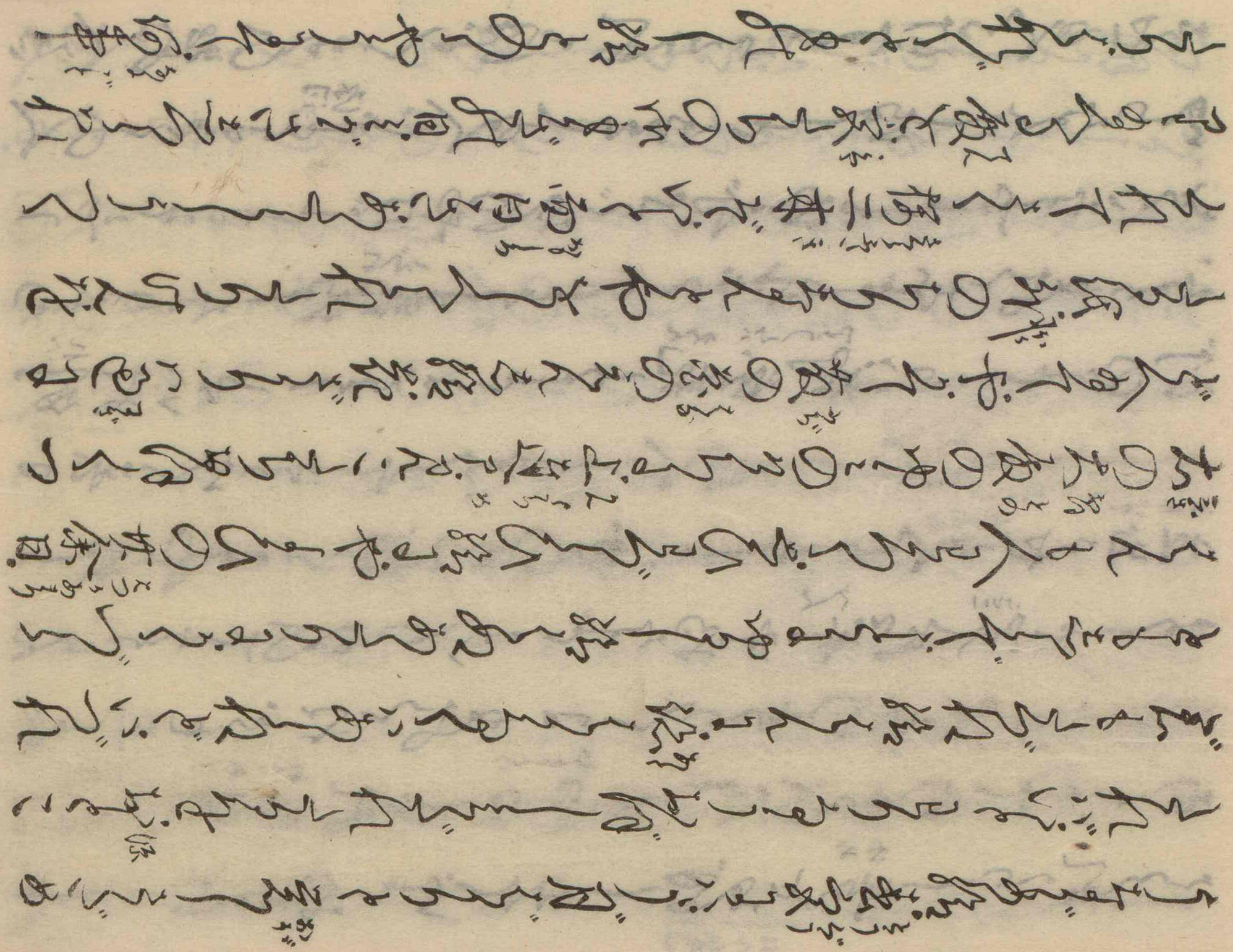
がうせひくべられぬ。今日は後妻のことなり
て、おぼれくし給けざうの琴つくりまつり給。
昨日のことよりもなほ面めしう面白し。藤つぼ
暁ままうのぼり給ほそりかれ有明出や。志ぬらんと
心もそらにて、せひいたゞぬくまゐるきよし清雅光を
つけてうかゞくせまひそれば、おまへよりもまうで給
けるほどまゝ今小のぢむよりかれたちて給り
つる車どもまうり出る。れかるゞくのことゞ給ける
中に四位少将右中弁なりどいそぎいでくなりく
まし給つるや。弘厳殿のれあがれなりんとみ給
つる。をしうはあしぬけくひどもしるくてゝる由



なのふをぞといひしき夜のこゝろくりこまへば
世にしてぬこゝろこそすれ有明の月の山来
を見ままぐへてとゝきつけなて金なへり夜
まもひさしうなりにけるとおぼとぞ笑も心
ぐるしれば云しらんとおぼして二条院へ
くしぬこゝろまくまいとうけくしげにおひなりて
おいぎやうつきぐらうくしき心ぐへいとことなり
なぬ所なうつゞ此心のまくまなしへなきんとお
ぼしまうるひめべしおとこの此をしへなれぐ
すくし人なれしることやまじらんとしこそうしろ
めたれ日ごろの此抱袴此ことなどをしへくら

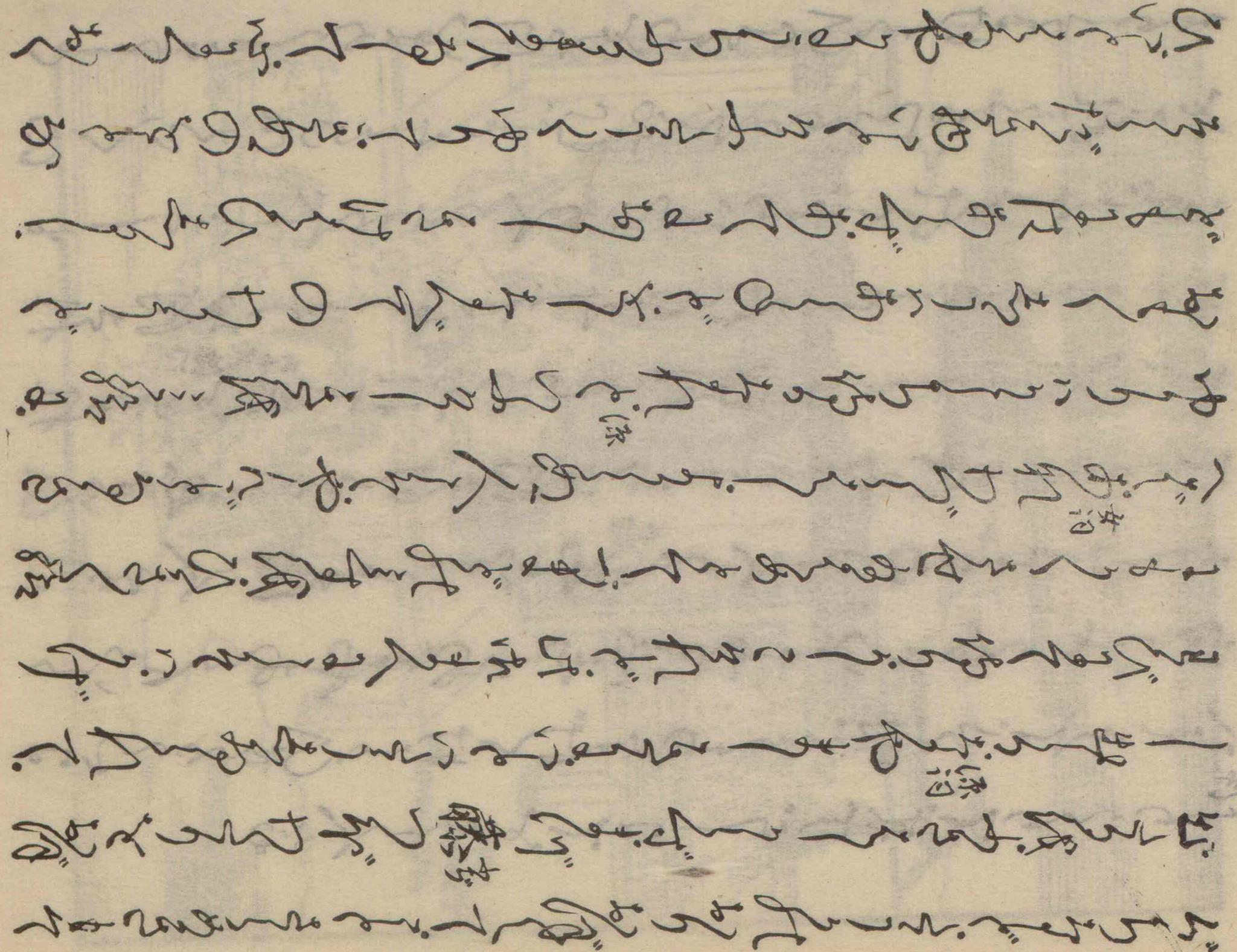
して、いで給を例のとぐらおしうお得をど今
くいとようなるらハされてかりなくハしるひまれハ
さぞお得いとのまたれいのふともしゐめんし給くず
つれぐとよろぶ見しめぐらされてさうの御こ
とまきぐりてやりしうるぬる事ハなくてとう
さひ給おとぐわらりなひて一日のけうをしこ
と冥給ごられよくひまてめいまうの御世四代
をなん見侍ぬれど此さびのやうまふこどもをやう
さくまひぐものくもどもとのかりてよくひの
がうことなん侍らざりつるぐらくのものくぶどども
お得りうしろほひくしうしろしめしとくのへ

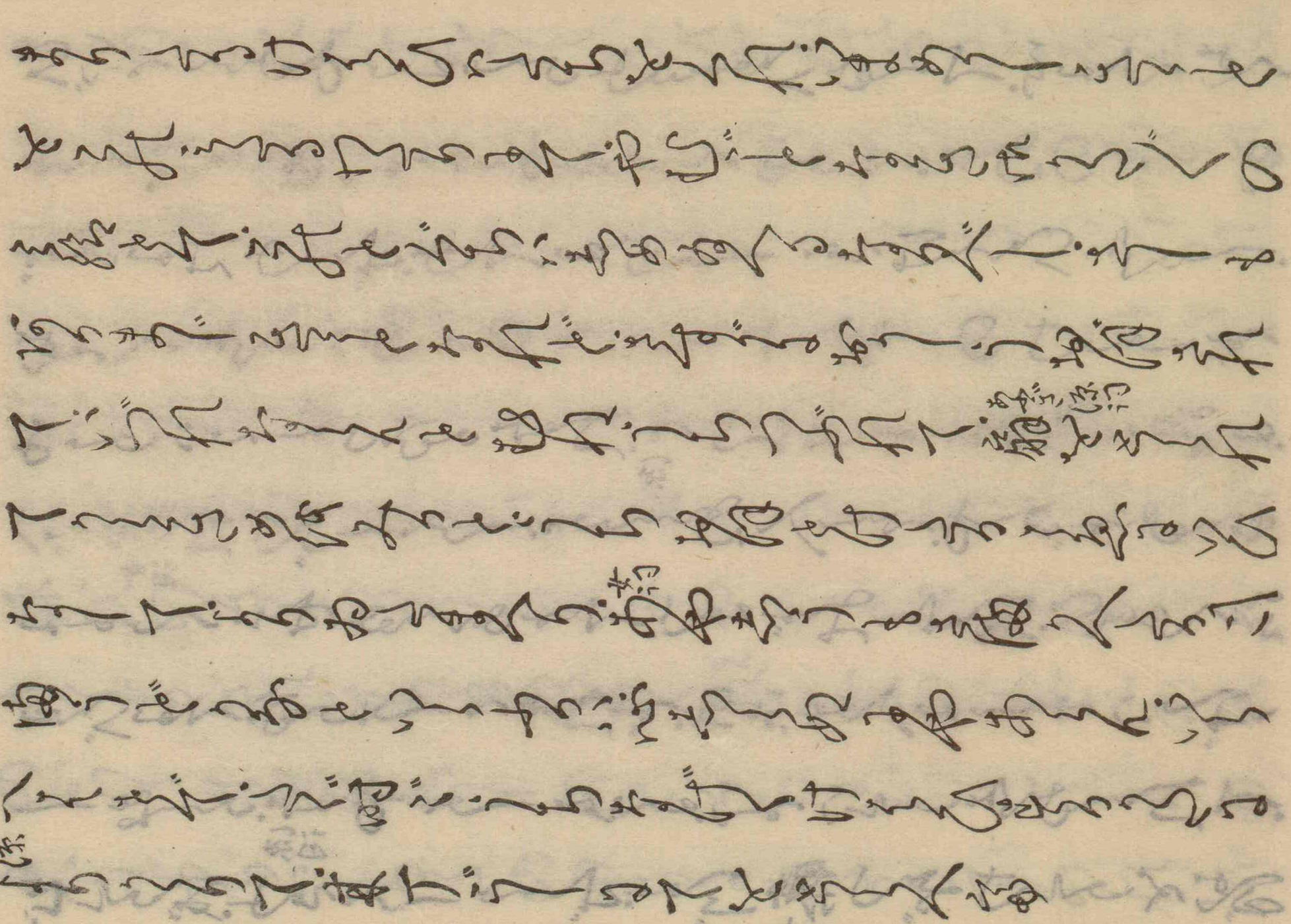
させぬへるけなりおほれもほどくまひ出ぬべき
ゆらなんし侍しとさそしぬへぐごとるとくのへ
とこなまふことも侍ぐ寸ぐ面白やけごとまそ志う
なりぬれ志どもをこうしこる羇侍しなりよろ
げのことよりハ柳芸苑まことまこうしこい此例
ともなりぬべくこ給へしまましてさらゆく書ま
立出させぬへらましかば世のめいぼくまや侍ら
ましと冥給弁中将なまどまいりあひてかうらん
ませなす後志何ぐりぐまもれくねどもしらべ
あそきてあそびぬいと面白しかれ有明の君は
ちれかりし夢をぬぼし出ていと抽なげかし

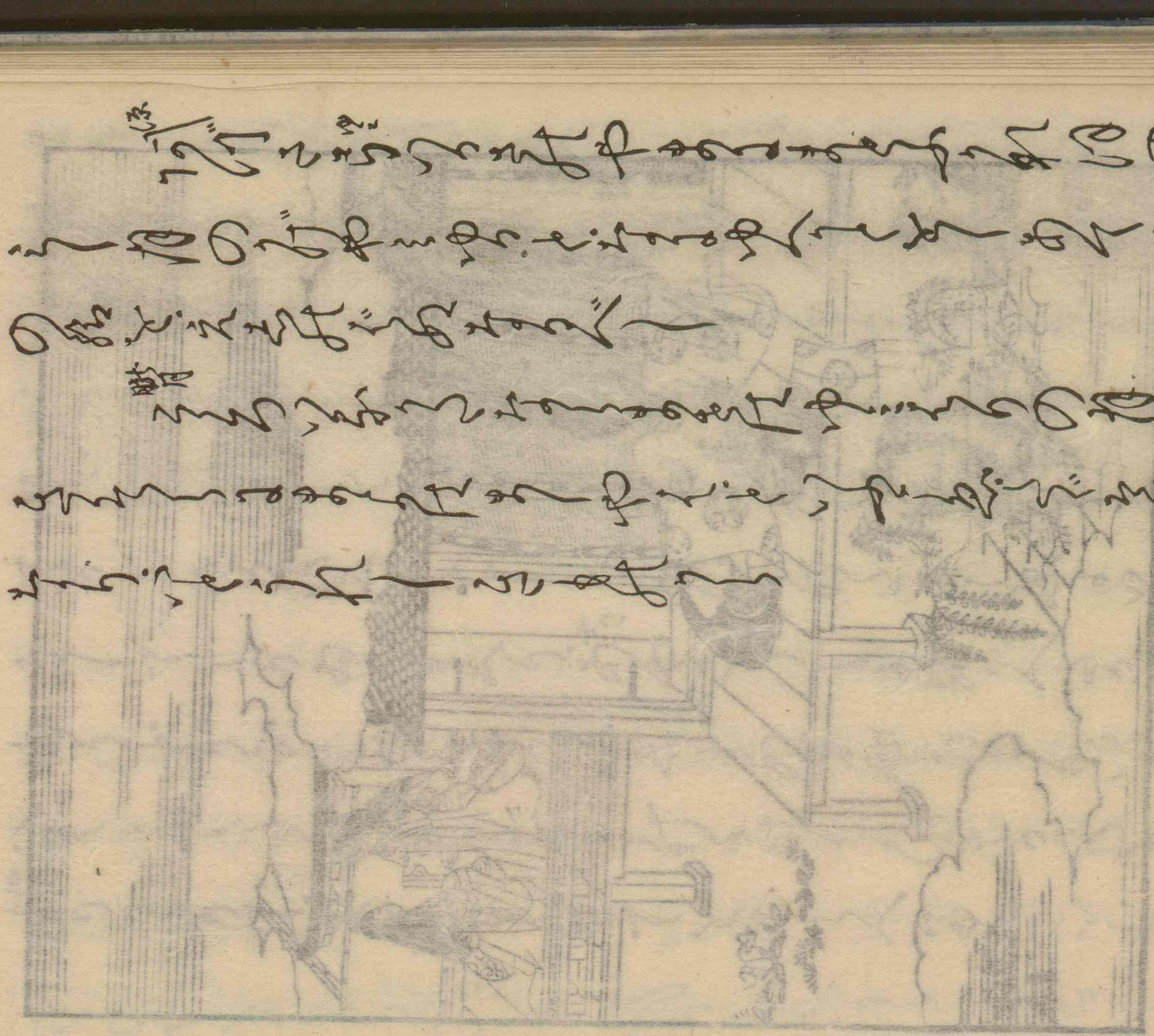


もいまめしうまてなしぬへり源氏の君なも一日
内まそ御ふいめんのついでまゝさゝし給しかぞ
おもせねばくちおしうものくもへなしと覚して
御このお将をとてまゐり給
わが宿の並しなべての色なるはなまかはさら
まゝさゝ後まゝさましうちまおもすり程まてゞへな
そうし給ふりがなりやとわらはきなてわざと
あめりとぞやうもれをよりし安こゝしちなどもれ
ひ出る所なればなべての庵まはしまゝさゝるど
の給ふ寸御こゝろひなどひさつくろひなていふ
うくつくほどまゝまゝれてぞわたり給さらしの

うらのきれはなをしえびぞめれしるがされしうい
とながくひきて、これ人いうへのきぬなるはおぎれ
うなほきみしてがるのなまめきうまて、いけれ
いりぬへるはさ海げるいとことなり、花のまほひも
けをされて、中ことざましはなん、何そびなどい
とおもしろうしぬひて、東をこうしかけゆく程は
源氏のきぬいうしぬひなやめるさ海はまてなし
ぬてぬぎれしちぬぬ、しん殿(でん)は女一の宮女三の宮
のおりします、ひんがしのとぐちはおりしてよりぬ
ぬへりぬぢいこるるのつまるはあるりてあれば、
ううしどもあげけるして、人ぞいぞぬるり、袖







69038
6AP78